学力向上推進拠点校指定事業（第Ⅱ期）２年次リーフレット　芦屋町立芦屋中学校

校　　長　山下　高志
学力向上推進担当　岸本　弥生　電話　093（223）0058

授 業 づくり

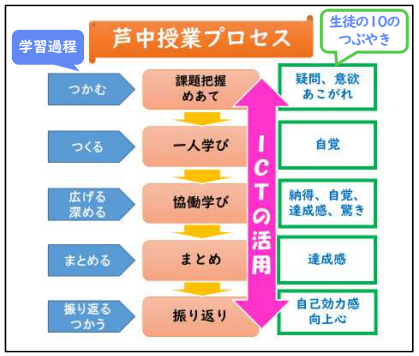
■ **これまでの取組における課題**
○ 教師主導型の授業展開で、生徒の主体的な目標設定や協働作業、教師による評価･称賛の場が不足していた。
○ 教師相互での授業参観の機会が少なく、実践効果の共有が図られていなかった。

【課題解決に向けた取組テーマ】　～生徒とつくる「芦中授業プロセス」の定着～

指導の実際（以下の取組が効果的だった!!）

≪取組１≫「芦中授業プロセス」の定着
◇　生徒が主体的で深い学びに向かうため、生徒とともにつくる『めあて』の設定、生徒が自分の言葉で記述する『まとめ』、１単位時間の学習を継続的に見とる「１０のつぶやきを活用した振り返りシート」を活用した『振り返り』の確実な実施を中心とした授業づくりに取り組んだ。

≪取組２≫ＩＣＴの効果的な活用
◇　「芦中授業プロセス」の定着のため、１単位時間の中で、必要に応じてＩＣＴを活用するようにして、各実践の中から効果的な活用の方法を精査して校内研修等で共有した。



【芦中授業プロセスのモデル】

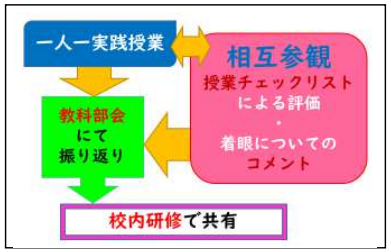
（取組１、２の成果）
○　生徒からは、「『めあて』を意識して参加することで、何を学習するかが、よく分かった（４件法で3.10）。」、「『まとめ』を考えて書くことで、学習の成果を確かめることができた（同3.15）。」、「振り返りをすることで、次の学習につなげることができた（同3.16）。」という声が多く上がった。特に「１０のつぶやきを活用した振り返りシート」が記入しやすく、効果的であった。また、「学習の中でＩＣＴを使うのは勉強の役に立つ」という声が93％であった。

《めあて》

当てはまるものに○をつけよう！		その内容をかこう
㋐「なんで」（疑問）		
㋑「やってみたい」（意欲）		
㋒「できるようになりたい」（あこがれ）		
㋓「なるほど」（納得）		
㋔「（失敗）怖くない、いいやそれでも。」（こだわり）		
㋕「わかった」（自覚）		
㋖「わからん」（自覚）		
㋗「できた」（達成感）		
㋘「すごい」（驚き）		
㋙「自分も頑張ればできる」（自己効力感）		
㋚「もっと」（向上心）		

【10のつぶやきを活用した振り返りシート】

≪取組３≫一人一実践授業と相互参観の実施
◇　「芦中授業プロセス」の定着とＩＣＴの効果的な活用を共有するため、一人一実践授業を行い、同教科を中心とした相互授業参観を実施した。授業参観では授業チェックリストを用いた評価を行い、グラフ化したものと、着眼１（「めあて」「まとめ」「振り返り」）及び着眼２（ＩＣＴの効果的な活用）に対するコメントをもとに各教科部会で振り返り、校内研修で全体に共有した。



【一人一実践授業後から研修会までの流れ】

（取組３の成果）
○　各教科独自の疑問点や悩みなど、授業実践に対する様々な意見交換をすることにより、新たな手法や改善策を共有することができた。

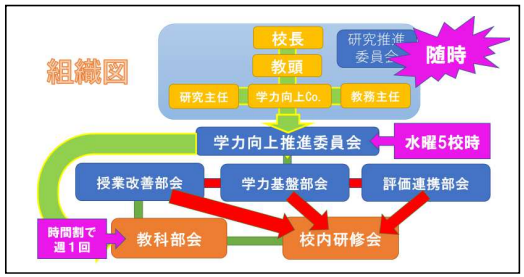
組 織 づくり

■ **これまでの取組における課題**
○ リーダーである研究推進委員会が大人数のため、連携が不十分であった。
○ 明確な検証改善サイクルが確立できていなかった。

【課題解決に向けた取組テーマ】
～組織の再編成と長期的な方向性の確立～

取組の実際（以下の取組が効果的だった!!）

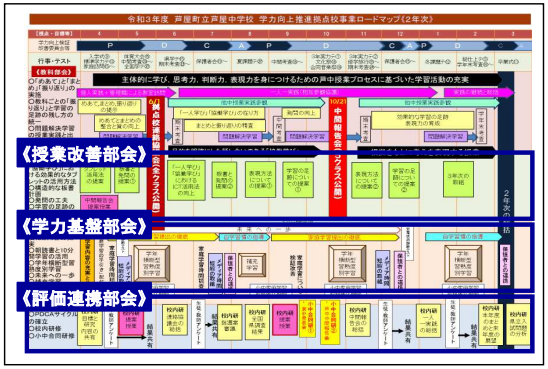
≪取組１≫研究推進委員会のスリム化と教科部会の充実
◇　教科主任を中心に構成していた10人の研究推進委員会をスリム化して５人にすることで、方向性や実践の協議を随時行えるようにした。
◇　教科部会を週時程内に位置付けた。



【研究組織図】

（取組１の成果）
○　長期的な見通しを立てることができるようになったことで、学力向上推進委員会、教科部会との連携がスムーズになり、学力向上に向けた取組の充実を図ることができた。

≪取組２≫年度当初の校内研修による目標とロードマップの共有
◇　学力向上プランの取組を計画的に実践するために、３つの研究部会（授業改善・学力基盤・評価連携部会）を軸とした「研究部会ロードマップ」を作成した。年度当初の校内研修で1年間のスケジュールを提示し、目標、方針の共有と研究意識の高揚化を図った。



【研究部会ロードマップ】

（取組２の成果）
○　校内研修によるロードマップの提示と目標の共有を早い段階で行うことにより、１年間の見通しをもつことができるとともに、定期的な検証に繋がった。

■授業づくりの取組における課題（●）、及び次年度の方向性（◇）
● 教科の特性を活かした「振り返り」の徹底が必要である。また、年間を通して単元のゴール像が見える単元デザインの工夫が必要である。
◇ 次年度は「芦中授業プロセス」の各学習場面に応じたICT活用の充実を図るとともに、活用の分類と学習効果とを関連付け、各教科の特質に応じた効果的な活用方法を追究する。

■組織づくりの取組における課題（●）、及び次年度の方向性（◇）
● 各部会それぞれの実践内容は定着してきたが、部会相互のさらなる連携強化が必要である。
◇ 部会ごとに示した取組の検証とその内容の共通理解を図り、全職員への共通実践へと繋ぐことで連携を強化させる。